

~~~~~  
 研 究  
 ~~~~~

入院生活における幼児後期の子どもの遊び体験に 対する親の認識

村田 絵美¹⁾, 藤原千恵子²⁾

〔論文要旨〕

幼児後期の子どもは遊びを通して社会性を発達させるが、入院生活では行動が制限されることから遊びも限られたものになりやすいと考えられる。そこで、本研究では入院している幼児後期の子どもを対象に、親の認識を通して子どもの遊びの現状を把握し、入院生活における子どもの遊びについての要望を明らかにすることを目的として面接調査を行った。その結果、入院生活には制限があるにもかかわらず子どもなりに適応していることが明らかとなったが、親は子どもどうして遊ぶ機会が少ないことから、対人関係の発達への悪影響を危惧し、種々の人と接する機会を欲していることが示された。また、入院生活での親も含めたサポートを必要としていた。

Key words : 幼児後期の子ども, 入院生活, 親の認識, 遊びの現状, 親の要望

I. はじめに

入院生活において子どもは不安や緊張等の精神的苦痛と病状や治療、処置による身体的苦痛を経験している¹⁾。さらに、入院児の場合、閉鎖された空間での単調でさまざまな制限のある生活を余儀なくされるために子どもどうして遊ぶ機会も制限され、外界からの刺激も乏しく成長・発達に影響を及ぼす場合が多いことを市原らが報告している²⁾。幼児後期では子どもどうしの遊びや仲間との相互交渉のなかで仲間関係を築きさまざまな経験をし、成長・発達するが、入院児はそのような経験をする機会が少なくなる状況にある。入院が発達に与える負の影響は、遊びをプログラムとして注意深く綿密に計画することで最小限に食い止められると言われ

ている³⁾。さらに、十分配慮した遊びは治療を前向きに取り組むための原動力になり、病気回復にも効果的な役割を果たすと考えられる。また、病院においても病棟保育士などが導入されているが、入院児の遊びの重要性に関する社会的認識は決して深いものとは言えず、具体的な施策も十分ではない。遊びの研究では、援助する側の看護師や保育士などによる遊びの提供の必要性、および重要性に関する研究はなされているが、遊びの当事者である子どもや援助される側にある親の視点から、入院児の遊びを検討している研究は少ない。ゆえに、援助される側からの遊びのニーズや生活環境のあり方についての検討が必要といえる。そこで本研究では幼児後期の入院児の親を対象に、援助される側にある親の認識を通して子どもの遊びの現状を把握

Parents' Awareness of Play Experiences of Late-infancy Children Undergoing Inpatient Treatment in Hospital

(2012)

Emi MURATA, Chieko FUJIWARA

受付 08. 1.24

採用 08.11.20

1) 大阪大学医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター (特任研究員)

2) 大阪大学医学系研究科保健学専攻 (教授)

別刷請求先: 村田絵美 大阪大学医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-2

Tel/Fax : 06-6879-3863

し、入院生活における子どもの遊びについての要望を質的な分析を通して明らかにすることを目的として面接調査を行った。

II. 研究方法

1. 対象

対象は大学病院に入院している3歳～6歳の幼児後期の子どもを持つ親15名とした。なお、幼児後期の子どもは遊びを通して社会性を発達させることから、本研究では幼児後期の子どもの遊びの現状を把握し、入院生活における子どもの遊びについての要望を明らかにすることを目的としたため、年齢や入院期間、疾病での分類は行わなかった。調査を実施した病院では幼児後期の子どもの場合、親が24時間付き添っている割合がほとんどであった。対象の人数は面接内容の分析を進めながら継続的比較分析により分類・抽象化を行い、カテゴリー生成のなかで新たに収集したデータから新しい特性や次元、関連性が見出されない飽和状態になる^{4,5)}までとした。なお、カテゴリーとは高度に抽象化の進んだ概念のこと⁵⁾で、概念、サブカテゴリー、下位カテゴリー、カテゴリーの順で抽象度が高くなる。分析の結果抽出されたカテゴリー間で、各々がどのように関連しているか、どのような経緯でそのカテゴリーが導き出されたかを検討し、カテゴリー間の関連を図で表した。

2. 調査期間

2006年4月～2006年10月。

3. 調査方法

研究協力は病棟看護師長と著者によって文書を用いて説明し、依頼した。

面接は対象者の都合のいい日時に著者が①入院期間、集団生活の経験有無、②家と病院での遊びの様子とそれに対する親の認識、③病棟での遊びに関する子どもの現状とそれに対する親の認識について半構成面接調査法によって行った。面接では対象者の了承が得られた場合、内容を録音したが、了承が得られなかった場合は面接終了後に文章として記録した。

4. 分析方法

面接調査で得られた内容のうち本論文では入院児の遊びに関する内容のみを抽出し、木下の修正版グラウンデッド・セオリー法⁶⁾を用いて分析した。分析手順は、①面接で得られた内容のうち研究目的関係箇所を抜き出した、②①について対象者間で比較検討し、それらの内容を説明するものを概念とした、③新たに得られた内容も合わせて比較検討し、サブカテゴリーを生成した、④最終的に生成されたサブカテゴリーを比較検討し、下位カテゴリーを生成した、⑤下位カテゴリーを比較検討し、カテゴリーを生成した。内容の妥当性・信頼性確保のために著者が生成したカテゴリー等を複数の研究者間で目的と照合しながら分析視点にずれがないか、カテゴリー等が適切かについて繰り返し検討、確認した。

5. 倫理的配慮

面接調査は、研究目的・方法・プライバシー保護・参加および中断の自由意志・診察や、治療への影響のないことを説明し、了解が得られた場合のみ同意書を得て実施した。面接ではプライバシーを確保し、データの管理も十分配慮した。本研究は大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

1. 対象者・その子どもの背景

対象者は母親13名、父親2名であった。子どもの年齢は3歳5名、4歳5名、6歳5名で、男児10名、女児5名であった。きょうだいあり13名、なし2名であった。保育園、および幼稚園への通園経験あり5名、なし10名であった。調査時の入院以前に入院経験あり14名、なし1名で、今回の入院期間は1週間未満10名、1週間～1か月未満1名、1か月以上4名であった。調査時の病棟での行動制限は、制限なし7名、条件付き1名、制限あり7名であった。病名は横紋筋肉腫、拡張型心筋症、動脈管開存、白血病、ネフローゼ、胆道閉鎖症、ウエスト症候群等であった。

2. 遊びに関連する認識の構成要素 (表1)

面接内容を分析した結果39個のサブカテゴ

リーが生成され、そこから14個の下位カテゴ

リーが生成された。最終的に「病気による遊び

表1 カテゴリーの生成過程

サブカテゴリー	下位カテゴリー	カテゴリー		
動きの小さい遊びを行っている	同年齢の子どもと同じような遊びができない	病気による遊びや対人関係の欠如		
外で遊ぶことを望んでいる				
入院生活では、遊びの内容が家とは異なるものになる				
家では、他児と遊んでいる				
病室、および病棟の出入りに制限がある				
同年齢の子どもと同じような遊びができない	他児や他者との関わり方がわからない			
他児との関わり方や遊び方がわからない				
きょうだいとの年齢が離れているため、きょうだいとほとんど遊ばない				
他児・他者となかなかうち解けることができない				
外泊時および、外出時は遊びを要求する				
子どもなりに自分の状況を理解しているので、遊びに関して無理を言わない	子どもなりに自分の状況を理解しているので、遊びに関して無理を言わない			
子どもが自分なりに遊んでいる				
限られた環境のなかで工夫して遊んでいる				
病室には、どうしてもいなくてはいけない時しかない				
他児との関わりを通して成長している				
病棟での他児との交流の場は、遊べる場であるとともに他児を介した遊び方を学ぶ場となっている	遊びや他児との関わりを通して成長している	入院生活への適応		
プレイルームでの遊びを通して新たな刺激を受けたり、学んだりしている				
他児がいる環境に慣れてくると他児と一緒に遊ぶことができる				
プレイルームが他児との交流の場となっている				
入院生活における治療や人間関係でストレスを溜めて辛くなり、拒否反応を示し、心身症状としても現れた			入院生活が心身に悪影響を与え、症状として現れた	子どもの心身への悪影響
過去の入院体験から入院中、親と離れることに強い不安感を持っている				
他児と遊べなかった間の発達が抜け落ちてしまい、非常にアンバランスな状態の発達になっている				
病院は楽しい所でもあるという意識を持てるような環境作りをしてほしい	入院生活でも楽しみを見出せる環境作りをしてほしい			
病棟で行われている遊びは治療を乗り越えるための支えの一つとなっている				
子どもの状態に合わせてさまざまな遊びを体験させてほしい				
海外のICUでは、日本では体験できない遊びや入院生活を体験することができた			子どもの状態に合わせてさまざまな遊びを体験させてほしい	入院生活における遊びと対人関係に関する要求
入院生活に関わる人が限定されることによる心身への影響に不安があるので、子どもの状態に合わせてさまざまな人に関わってほしい				
乳幼児を対象とした院内学級のようなものを病院が確立してほしい	入院していても集団生活を体験できる環境を作ってほしい			
子どもどうしのつながりを持てる環境がほしい				
遊んだ経験が少ない		同年齢の子どもと同じような経験を積ませてあげたい		
季節を感じられるようにしてほしい				
病気のため通園経験がない、あるいは少ない				
同年齢の子どもと同じような経験を積ませてあげたい				
親はプライバシーが気になって、同室の親子を遊びに誘うタイミングが難しいと思っている	親どうしのつながりを持てる環境がほしい		入院生活における希望サポート	
親にとっても病棟で行われている遊びは、他児の親との交流の場となり、精神的にも効果的に作用している				
子どもが遊べる環境を作るために親どうしのつながりを持てるような環境がほしい				
入院生活では遊ぶ機会が限られるなどのさまざまな制限による心身への悪影響の不安があるので対策を取ってほしい		心身のサポートをしてほしい		
突然の遊びの中断や治療の恐怖による心身への影響が心配なので、精神的なサポートをしてほしい				
遊びなど医療以外の子どもの生活に関することも含めて患者側の意見(要求)を聞いてほしい	子どもの生活を含めた患者側の要求を聞いてほしい			

や対人関係の欠如], [入院生活への適応], [子どもの心身への悪影響], [入院生活における遊びと対人関係に関する要求], [入院生活における希望サポート] の5個のカテゴリーが明らかになった。これらのカテゴリーは図1の関係を示していた。なお, 「」は対象者の言葉である。

1) [病気による遊びや対人関係の欠如]

このカテゴリーは病気のため遊びの内容や人との関わりが制限されるので, 子どもが同年齢の健康な子どもと同じような遊びや人間関係を築けないなどの入院生活での遊びを中心とした子どもの成長・発達のネガティブな内容の下位カテゴリーから構成されていた。具体的には「ずっと外に出れなかったので, ずっと結局テレビ, ビデオしかなかったから遊ぶのもどう遊んだらいいのかわからへんみたい。遊び方とか, お友だちとどうしたらいいか」などがあつた。

2) [入院生活への適応]

このカテゴリーは物理的環境や人的環境において大小さまざまな制限を伴う入院生活を子どもなりに理解して限られた中で遊べることを見つけ, 工夫して過ごし, また遊びや他児との関

わりを通して成長しながら入院生活に適応しているという内容の下位カテゴリーから構成されていた。具体的には「プレイルームや(病院の)展望台に行ったり, 画面の泳いでる魚(バーチャルな水槽)を見に行ったりしてる」, 「プレイルームで他の子がしてるのを見て糊のつけ方とか学習してるみたい〜中略〜プレイルームに行つて, これは丸だよとか赤色だよって。半年前にはちょっとわからなかったんだけど遊びの中でだんだんわかつてきて, 最近大きい小さいもわかつてきて」などがあつた。

3) [子どもの心身への悪影響]

このカテゴリーは子どもの様子から入院生活の人間関係や治療・処置等のストレスがあるうえ, 遊びの内容が限られている等のさまざまな制限により心身に悪影響を受けているという内容の下位カテゴリーから構成されていた。具体的には「鬱状態みたいにはなりますよ。すごくイライラもするし, 物投げたりとかね, 言葉も悪なつたりとかするし, 急に怒り出したり泣き出したりとか〜中略〜特に外に出られない時」などがあつた。

4) [入院生活における遊びと対人関係に関する要求]

このカテゴリーは入院生活での制限のためさまざまな遊びや人間関係などを経験できる機会や楽しみを見出せる機会が少ないことへの不安があるため, 楽しみを見出せるような取り組みをしてほしいという要望や, このような環境下だからこそ子どもの状態に合わせたさまざまな遊びや人間関係を体験させたいという内容の下位カテゴリーから構成されていた。また, 本研究対象の大学病院にはプレイルームがあり, 定期的に遊びのボランティアがプレイルームに来るが病気の状態や発達レベルによっては他児と遊べず退院後の不安もあるため子どもの状態に適した遊びの体験を求める内容の下位カテゴリーからも構成されていた。具体的には「季節を感じるようなことがやっぱり。しんどい時もあるけど入院しなあかんのやったら楽しいようにしたい」, 「集団生活をちょっとでも学ばしてもらえる機会がほしい〜中略〜病院にいたらなかなかできない面もあるけど治療が終わつて突然幼稚園にボンツて行けるかっていったら本人も心配やし, やっぱり親も心配」などがあつた。

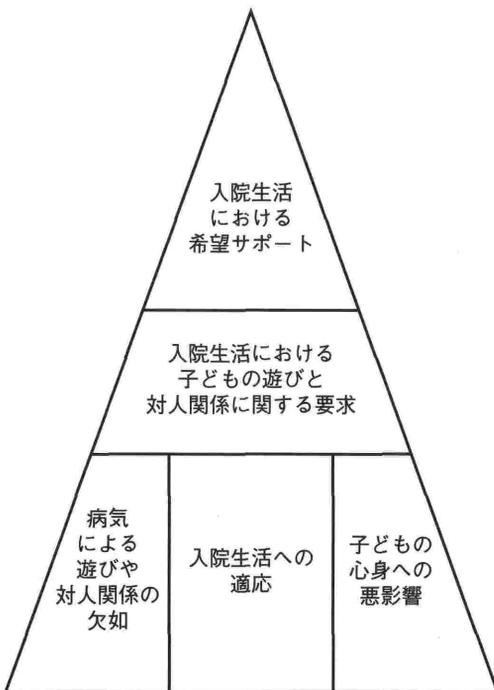


図1 入院生活における子どもの遊びを中心とした親の認識におけるカテゴリーの構成

5) [入院生活における希望サポート]

このカテゴリーは、子どもの遊びを中心として入院生活での医療以外の希望を聞いてくれることや親子の心身のサポートなど子どもの生活を含めて入院生活での医療以外の患者側の要求も聞いて欲しいという内容の下位カテゴリーから構成されていた。具体的には「要求したりしたら(病院は)ちゃんとやってくれるんやろか。病室から出られへん子や寝たきりの子の親は病室に来て遊んでほしいと思ってる」、「もっといろんな交流とか持ちたいし、やっぱり家とか社会に出れないぶん刺激も絶対少ないやろうし、感じれることも少ないやろうから感じれる場がいっぱいあったらいいかな」などがあつた。

3. 入院生活の遊びに関連することについての親の認識の関連(図1)

[病気による遊びや対人関係の欠如]と[入院生活への適応]、[子どもの心身への悪影響]は、いずれも入院児の日常生活を通して生じることであるため同時に起こっていたため図1のように並列の関係になった。これらのカテゴリーを基に親は[入院生活における子どもの遊びと対人関係に関する要求]を認識していたことから図1のように前述した3個のカテゴリーを基にこのカテゴリーが成り立っていた。そして、先に述べたすべてのカテゴリーが一体となり、そのうえで[入院生活における希望サポート]が成り立っていた。

IV. 考 察

1. 遊びを中心とした親の認識

入院生活での遊びの必要性はすべての親が認識しており、先行研究の結果と一致していた⁷⁾。実際の入院生活では病気のために遊びの内容や人との関わりが制限され、同年齢の子どもと同じような遊びや対人関係が欠如していることも先行研究で指摘されていることと一致していた⁸⁾。このような現状は、入院児の社会性の発達に影響を与えると考えられる。このような現状に加え、人間関係や治療・処置等のストレスで子どもは心身に悪影響を受けていたことから、入院生活が子どもの心理状態に与える影響の大きさが示唆された。

幼児後期は遊びが生活そのものであり、仲間との遊びを通して社会性や知性が発達していくことから、入院生活ではさまざまな制限、治療・処置等の苦痛や恐怖による影響を懸念するようなネガティブな遊びに対する認識のみが表出されると予測していたが、親は子どもなりに工夫して過ごし、適応している等、子どもの遊びに対するポジティブな面にも目を向けていることが明らかにされた。この結果は、限られた厳しい環境下でも子どもにはその環境に適応できる柔軟性や成長していく力が備わっていることを示唆している。しかし、子どもは自分なりに適応しているとはいえ、その努力にも限度があると推察される。子どもの成長・発達を考えた場合、健康な子どもに比べて遊びや対人関係など社会性や情緒面等の発達に関することが入院生活では不足しやすいため[入院生活における子どもの遊びと対人関係に関する要求]が強く認識されていると考えられる。また、これらのことから親は入院生活で子どもの遊びを中心とした入院生活全般のサポートを望んでおり、これは、幼児後期の子どもにとって遊びが生活と切り離せないものであるため必然的な要望として表出されたと思われる。このような子どもの遊びの現状と親の要望を踏まえたうえで、入院生活でも取り組むことが可能でかつ個々の子どもの状態に合わせた遊びのプログラムが必要と思われる。入院生活において行事に合わせて集団遊び⁹⁾などを企画することは、単調になりがちな入院生活にメリハリのある楽しみの機会をつくることになる。このような機会は[病気による遊びや対人関係の欠如]の改善につながり、[入院生活における子どもの遊びと対人関係に関する要求]に応えるものになると考えられる。また異年齢の集団に入りにくい子どもも存在するため、まず幼稚園のような同年齢の子どもと遊べる機会を定期的に設けることも有効である¹²⁾。

親は入院児の遊びを中心とした入院生活全般における心身のサポートを望んでいることから、武市ら¹³⁾も指摘しているように子どもだけでなく親も含めて病棟スタッフからのサポートを充実させる必要がある。そのためには集団遊びに親子で参加する時間や親たちの交流を意識

的に設けることも必要となる。

また、病室から出られない子どもも楽しみを見出せるように病室や病棟の壁、子どもに関わる人の服装の色や模様を子どもが好むものにするなどの工夫^{14,15)}をし、子どもの状態に合った遊びや楽しみに触れられるようにする必要がある¹⁾。このような子どもの状態に合わせた楽しみを設けることが、さまざまな制限や苦痛を味わう入院生活でのさまざまなストレスの軽減に役立つと考えられる。

以上のような環境が整うことは入院児の遊びや入院生活における楽しみを充実させることになり、それは入院生活のストレス発散、入院児の発達等にも効果的に作用するうえ、対人関係の欠如も緩和されていくと考えられる。

2. 本研究の限界と課題

遊びのニーズは入院期間や病気により認識が異なる可能性が考えられるため、その点を考えて対象選定する必要がある。本研究は一病院で実施したが今後、病院数・病院種別を増やし、さまざまな病院環境の子どもが必要としていると考えられることを親の認識を通して把握する必要があると考えられる。

V. 結 論

面接調査で得られた内容を分析した結果5個のカテゴリーが生成された。その結果、入院生活では子どもの遊びと対人関係が欠如しているため、入院児は遊び方や人との関わり方を学ぶ機会が少なく、対応の仕方がわからないなど社会性を養う機会の少なさ故の影響が明らかとなった。また、さまざまな制限や苦痛等のため、心身に悪影響を受けていた。一方で、子どもが自分なりに入院生活に適應していることが明らかとなった。特に、他児との交流が持てている場合、親は子どもの成長を認識していた。このような現状から親は、入院生活での遊びと対人関係について要望を持っており、さらに、遊びを中心としたサポートを必要としていることが導き出された。

よって、今後入院児の遊びを検討する場合、子どもの社会性を養うためにも遊びを通して他者と関わる機会を充実させる必要がある。さ

らに、子どもへは遊びを通してのメンタルケアや発達へのサポート、親へは入院生活での医療以外の希望も聞いてもらえる体制など子どもの遊びを中心とした入院生活全般へのサポートを考える必要があることが示された。

本論文の要旨は第54回日本小児保健学会にて報告した。

なお、本論文は修士論文の一部を加筆して提出した。

文 献

- 1) 天野歌子. 制限がある遊びの工夫. 小児看護 2004; 27 (3): 318-323.
- 2) 市原香波, 佐々木友紀子, 玉川百里, 他. 遊びと保育を通してみた入院児の成長・発達. 小児看護 2004; 27 (3): 265-275.
- 3) Richard H. Thompson, Gene Stanford. 病院におけるチャイルドライフ 子どもの心を支える“遊び”プログラム. 初版 中央法規 東京, 2000.
- 4) 定廣和香子, 舟島なをみ, 杉森みどり. 臨床場面における看護ケアの効果に関する研究—ケア場面における患者行動に焦点を当てて— 看護教育学研究 1996; 5 (1): 1-21.
- 5) 山本則子, 萱間真美, 太田喜久子, 他. グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス. 第4版 文光堂 東京, 2005.
- 6) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 第2版 弘文堂 東京, 2004.
- 7) 裏 桂子, 志賀寿美代, 池辺清美, 他. 小児科病棟における遊びの傾向—家族に対する意識調査から— 大分県立病院医学雑誌 1997; 26: 197-202.
- 8) 堀田法子. 幼児期の発達段階における遊び行動の差異. 日本看護学会論文集 小児看護 1995; 第26回: 136-138.
- 9) 安藤昌子, 広瀬いづみ, 鎌田真紀, 他. 長期入院児の遊びへの取り組み. 小児看護 1999; 22 (4): 411-418.
- 10) 峰 由貴, 井口絹枝, 日野明子. 成長・発達段階に応じた遊びの援助. 小児看護 2004; 27 (3): 276-281.
- 11) 中村崇江, 有村理美. 一般的な発達段階を踏ま

- えての遊びと関わり—乳児期後半と学童期・思春期の事例を通して—, 小児看護 2004;27 (3): 313-317.
- 12) 佐藤邦枝, 伊藤龍子. 入院している子どもに対する“遊びとプリパレーション” —イギリスとアメリカにおけるチャイルドライフ・プログラムの実際をとおして—, 小児看護 2002;25 (7): 913-920.
- 13) 武市光世, 北村美鈴, 伊野真紀, 他. 入院中の子どもに付き添う母親の看護婦に対する役割認識と役割期待の充足—相談・指導に焦点を当てて—. 日本看護学会論文集 小児看護 1998; 第29回: 35-37.
- 14) 井林美恵子, 浜田真由美. 制限がある場合の遊びの工夫—発達チェックを行いながら遊びの提供を試みて—. 小児看護 2004; 27 (3): 291-297.
- 15) 伊藤美佐子. 手術などで一時的に手や足が不自由になった子どもの遊びの工夫. 小児看護 2004; 27 (3): 324-328.

[Summary]

Late-infancy children develop social skills by playing. It is thought, however, that play tends to be limited when a child is in hospital—after all, this is a place where behavior is restricted. The objective of this research is to ascertain the current state of recreation among late-infancy children in hospital through their parents' awareness of such activity. Parents were interviewed to clarify their wishes regarding their hospitalized children's playing. The results showed that the children were able to adapt within the restrictions that came with being hospitalized, but that parents were concerned about the effect that the lack of play opportunities would have on their children's ability to develop interpersonal skills, and wanted more opportunities for the children to interact with others. The results also showed that support for hospitalized children—including that for their parents—was needed.

[Key words]

late-infancy children, life in hospital, parents' awareness, current state of play, parents' wishes